

濱口桂一郎著
日本の雇用と中高年

ちくま新書

定価・780円＋税

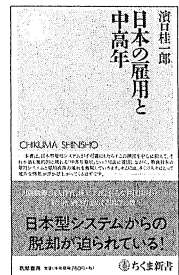
本書は、「日本型雇用システム」の中の「中高年雇用」に焦点をあてながら、戦後日本の雇用制度と雇用政策の変遷を分析する。

日本型雇用の特徴である「メンバーシップ型正社員」を中心とした、企業の生涯生活保障Ⅱ年功主義雇用システムの行き詰まりが、能力主義をへて成果主義にいたる人事・賃金管理となり、中高年への相次ぐリストラ(最近では「追い出し部屋」)の背景にある。

こうした雇用政策と雇用制度の実態が、欧米の雇用システムとの比較により、日本の雇用システムの特徴を浮き彫りにする点でも、興味深い。

第1章では、「中高年問題の文脈」として、本書の概観を示す。第2章は、「日本型雇用と高齢者政策」で日本型雇用といわれる雇用政策の成立の背景と、その変容、転換を展開。第3章「年齢差別禁止政策」、第4章「管理職、成果主義、残業代」とつづき、今日進められている成果主義やホワイトカラー・エグゼンプションなどの政策課題についての批判的分析がされる。

第5章では、場当り的な高齢者雇用政策の



行き詰まりを解決する方法として、

「ジョブ型労働社会」を提言する。

ここでいう「ジョブ

型正社員」は、中高年の職務(ジョブ)経験を生かし、評価する雇用制度である。これは、安倍内閣が進めようとしている「限定正社員」制度と一部重なる部分があるため、労働界からの疑問や批判もありそうだ。

しかし、現在の中高年の雇用不安や、企業の思いのままにリストラをされ、人生を左右される現実をそのままにしてよいのか、という指摘は説得力がある。

「近年の『追い出し部屋』をめぐる動きを見ると、多くの中高年が信じてきたように、ジョブ無限定こそが雇用安定の基盤であるどころか、……『貴方に適した職務はないという結論に達しました』等と平然と言われてしまうのが実態」と指摘。そして、「そこに配転されても雇用契約上文句が言えないような労働者がその雇用形態にしがみついている」点にこそ問題の所在がある、という。

「ジョブ型正社員」は、そうした呪縛から中高年を救済する方法だと著者は言う。しかし、どんな制度を作っても、労働者が使用者に従属したままでは、労働者の権利は守れないという現実、肝に銘じなければならぬ。

(評＝松本重延)

たちよみBOOK・MAGAZINE

◆「韓国沈没船事故で批判の矛先を逸らされ、『美味しんぼ』で批判の口を閉ざされて」(週刊金曜日) 5月23日号)

著者の北原のみりさんはライターであると同時に女性向けアガルトグッズショップ「ラブピースクラブ」代表でもある。

「韓国の旅客船セウォル号沈没事故の報道が、あまりにも過剰に見えるのは、私だけでしょうか。……毎日のように亡くなった若者たちの映像を流し、韓国政府や海洋警察の対応の悪さ、現場の船員たちの判断の誤り、その責任の所在について責め立てる日本のメディア……他国の戦争にも積極的に巻き込まれ、参加したいですわっ! という総理の憲法違反発言こそ、翌日のワイドショーでギャンギャン騒ぎ立ててほしいものだったけれど、局によっては集団的自衛権の話よりも、セウォル号特集のほうがずっと大きな扱いだ。……ああ、どうかこの批判力を、みずからの国に向けていただきたいです!」と思うけれど、もしかしたら、メディアも自分の国を批判するのは、怖いかもしれないね。なぜって政府と違う意見を言ったら、つぶされるかもしれない、という例ができてしまったから。小学館の人気漫画『美味しんぼ』批判だ! 「菅官房長官はじめ政治家が『美味しんぼ』を批判し、さらに安倍首相が福島県を訪れ、『根拠ない風評に国として対応』と言いつ切り、サクラランボを食べ、『一度首相を辞めたが、今はやりたいと思つていたことが出来るようになった。夢を持